

## 幼大連携のこどもコンサートについての一考察 —「第2回 京女こどもコンサート」を対象として—

荒川 恵子  
(教育学科)

ガハプカ 奈美  
(教育学科)

松田 幸恵  
(京都幼稚園)

大学生が主体となって行った幼稚園でのコンサートを対象に、プログラムの内容検討、こどもたちの行動の質的観察、幼稚園教諭による追跡調査を行い、幼大連携の成果と課題と可能性について考察した。コンサートにおいて、こどもたちと大学生間で、あたたかいやり取りが成立することが何より重要で、こどもたちのよく知る曲を一緒に歌ったり、音楽クイズを行うと参加者の満足度が高かった。こどもたちは、デジタル地球儀「ダジック・アース」と手歌に強い興味を示し、コンサート終了後2週間の間、言及が見られ、コンサートが子どもたちに影響を与えていることが示唆された。

キーワード：こどもコンサート、幼大連携、手歌、セタ、ダジック・アース

### はじめに

幼稚園や小・中・高等学校に演奏家が訪問して訪問演奏会を行う試みが、しばしば行われている。第1著者（荒川）は音楽学の研究者であるが、2000年よりコロナ前までの約20年間にわたり、毎年、大阪府下や京都府下の幼稚園で、演奏家や落語家が出演する訪問演奏会活動を継続的に行った。2019年からは、博物館のホールや音楽ホールにて、社会教育の一環として、「地球温暖化」「SDGs」など、地球の課題や地球の文化や天体について学べる内容の科学与音楽の融合イベントを行ってきた (<https://sites.google.com/view/tentaimusic/>)。

第2著者（ガハプカ）は、声楽家であるが、声楽教育の研究者でもあり、学生主体の地域貢献のイベントを数多く経験し、現在は、インクルーシブな音楽活動を展開している。第3著者（松田）は幼稚園の主事であり、大学との多くの連携企画を幼稚園に受け入れている。例えば、音楽関係であれば、荒川は演奏家や卒業生や学生と訪問演奏会を行う他、インドネシアの影絵芝居、箏奏者による体験コンサートのコーディネートを行った。ガハプカもフランスのDUMI (Diplôme Universitaire de Musicien Intervenant) をコーディネートした。これらの背景と経験から、本研究では今夏に行った

「乳幼児のための第2回京女こどもコンサート」（以下、「第2回京女こどもコンサート」）を対象として、幼大連携の音楽活動の成果、課題、可能性について考える。

### 1. 幼稚園でのコンサートの環境を整える

#### 1.1. 生演奏に触れる機会を作る重要性と乳幼児への配慮

駒 2008、久保田 2009、佐々木ら 2021 など、幼稚園や学校で、演奏家や大学生が行った訪問演奏会を対象とする先行研究で、挙げられている最も重要な成果は、こどもたちが「生演奏」に触れるられるということである。幼稚園や学校の普通の保育や教育では経験できない体験ができることは何にも代えがたい貴重なものである。保護者にとっても同様である。

坂本 2025 では、2024年夏、「第1回京女こどもコンサート」が、管楽器の専門家である坂本により、大学交響楽団と自身の管楽器ゼミの学生を指揮指導して、自ら司会も行い実施された際のことについて詳述されている。管楽器、弦楽器のバリエーションに富む音を、こどもたちは興味深く聴いていた。未就学児を受け入れるコンサートが多くはない現状の為、参加したこどもの保護者や、外部からの親子連れから、貴重な機会であると好評であり、リズムを切り口とし

て、参加型で行われた内容も発展の可能性を示していた。しかし、今回は、大学生主体で行う内容にした。

会場は、大学のホールに、こどもや親子を招いて開催することも可能であるが、幼稚園で行うと、乳幼児がむずかった場合、園舎内に休める場所があるという安心感がある。そこで、幼稚園でこそ演奏会をしたいと考えた。今回は、園内に立派なホールがあるので、それを活用した。

### 1. 2. 幼大連携としての実施を考える

保育者や小・中・高等学校教諭を目指す大学生による主体的な演奏会ができると、大学生にとっても有効なアクティブラーニングとなり、教育的に実りが多いと考え、今回、教員は表舞台には出ず、学生が主体となってできる内容を検討した。授業時間を使って議論するなど、「協働」の時間を重視した。

また第2著者が関わり、大学がインクルーシブ音楽活動団体であるホワイトハンドコーラスNIPPON (<https://elsistemaconnect.or.jp/activity/whc-nippon/index.html>) と提携しているということを活かして、講師を招き、乳幼児でも参加できる内容の手歌(しゅか)を当日導入することも試みた。事前に、大学生たちは指導を受けた。これについては第4章で詳述する。次章以降、実際に行ったコンサートの内容、こどもたちの質的観察、幼稚園教諭の協力による追跡調査結果の検討を行う。

## 2. 第2回京女こどもコンサートの実施

「京女こどもコンサート」は、前述のとおり前年の2024年度から始めた。前年は、荒川と松田は、運営面で支えた。今回は、大学生が主体となって行うことを目指し、荒川が兼担する児童学科(幼稚園教諭養成)の4回生のゼミ生11名が2名ずつペアとなって司会を担当し、音楽教育学専攻(中高音楽科教諭養成)の声楽ゼミ(ガハブカが担当)、管楽器ゼミ、ピアノゼミの学生及び実技が得意な論文ゼミ(荒川が担当)の学生、計24名が演奏を担当して行った。

実施については以下のとおりである。

日時：2025年7月1日(火) 10時～11時

会場：京都幼稚園 文中ホール

参加者：計130名

内訳：大人43名(園児保護者と外部の子どもの保護者)、こども87名(園児61名、外部参加の乳幼児26名)

### 2. 1. 舞台の配置について

文中ホールは、幼稚園の敷地内にある。大学の歴史上、初期に使われていた学校名が冠されており、上から400席の椅子をおろして設置することができる立派な建物である。今回はパイプ椅子を置いた。最前列に乳幼児が座れるようにマットを敷いたところ乳幼児の親に喜ばれた。ステージ中央に、写真1のように2Mのダジック・アース(京都大学大学院・理学研究科・地球惑星科学専攻 齊藤昭則准教授らの開発。<https://www.npo.dagik.org/>)を設置し、地球や宇宙のコンテンツを投影した。荒川・松田2024には、2023年に教員やゼミ生とダジック・アースを設置してセタコンサートを行った際のことを詳述している。



写真1 「第2回京女こどもコンサート」の様子

ステージ下の下手にグランドピアノを置き、演奏は主にステージ下で行った。冒頭ではステージ上手に児童学科の学生11名、下手に音楽教育学専攻の学生8名(声楽ゼミ6名、管楽器ゼミ2名)が並んだ。伴奏者以外のピアノゼミ

2名は後ろで待機していた。譜面台ごとに、色とりどりの画用紙を置き、全体にカラフルな色を使い、華やかな印象を生み出した。

2.2. 演目について

演奏会は、表1のように行った。オープニングは、やなせたかし作詞・三木たかし作曲《アンパンマンマーチ》で始め、七夕が近いことから、「七夕の話」と権藤はなよ作詞・林柳波補作詞・下総皖一作曲《たなばたさま》を園児と歌い、それ以降、星や月や地球に関する作品を演奏し、エンディングでは杉本竜一作詞・作曲《ピリブ》を園児と歌って締めくくった。

鑑賞として、声楽ゼミメンバーによる女声合唱で、宮澤賢治作詞作曲《星めぐりのうた》、フランス民謡《月の光に》、管楽器ゼミによるトランペット二重奏で、リー・ハーライン作曲《星に願いを》、フルートとエレクトーンによるアンサンブルで村松崇継作曲《Earth》、シロフォンとピアノ連弾によるアンサンブルで、カミュ・サン＝サーンス作曲『動物の謝肉祭』より《化石》を演奏した。鑑賞の楽器については、演奏できる学生がいることから選んだ。これらの合間に、科学の話やクイズを入れた。

科学の話は《星めぐりの歌》に多くの星が出てくるため、その前に星座の解説や夏の大三角形の解説を行った。また《月の光に》の前には月の話をした。動物のシルエットクイズも行った。身体的表現を入れたかったのでプログラムの中央に「手歌」を取り入れたことが今回の大きな特徴である。「手歌」については、第4章で、その意義と質的観察結果を記述する。

表1 第2回京女子どもコンサートの構成

種類	曲目など	内容と意図
オープニング	やなせたかし作詞・三木たかし作曲 《アンパンマンマーチ》	皆がよく知り好まれている作品を選んだ。NHKテレビ「あんばん」の放映時で、その影響もふまえて選曲した。

お話を聞く	七夕の物語	七夕が近かったので、「天の川」「織姫」「彦星」の話をし、子どもたちに願い事を聞いた。
歌う	権藤はなよ作詞・林柳波補作詞・下総皖一作曲《たなばたさま》	幼稚園でも教えていると思われるので皆で子どもが歌える為、選んだ。
科学の話をお聞き	夏の大三角形について	この後、星座が多く出てくる歌を歌うので「星座」とは何か、さそり座のアンタレスと、夏の大三角形について解説した。
声楽ゼミ生による女声合唱	女声合唱 宮澤賢治作詞作曲 《星めぐりのうた》	子どもたちにとっては未知曲であるが、構成上、必要と考えた。曲中出てくる、「さそり座」「わし座」「こいぬ座」「りゅう座」「オリオン座」「アンドロメダ星雲」「こぐま座」「おおぐま座」などをダジック・アースで投影。
二重奏	トランペット二重奏 リー・ハーライン作曲 《星に願いを》	トランペットを演奏できる管楽器ゼミの学生がいたので、「星」が出てくる曲を検討してもらい選曲した。
手歌指導と手歌	手歌 《きらきら星》	大学が提携するホワイトハンドコーラスNIPPONの団体から手歌の講師を招き、参加客に向けて指導してもらった。大学生たちは事前に学んで習得していたので、子どもの中に入って手歌を行うことにした。
科学の話をお聞き	月について	月のうたを聴く前に、月の説明をした。日本ではウサギが住んでいるように見えていることになっているが、カニやおばあさんに見える国があると紹介した。

声楽ゼミ生による女声合唱	女声合唱 フランス民謡《月の光に》	七夕がテーマであったので、星や月の曲を選んで鑑賞時間を設けることにした。事前に、幼稚園に楽譜を渡していたが、女声合唱譜の為、音域が高かったため、こどもには心で歌うようにと呼びかけることにした。
アンサンブル演奏	フルートとエレクトーンによるアンサンブル 村松崇継作曲《Earth》	フルート、エレクトーンをそれぞれ演奏できる学生がいたのと、ダジック・アースを出したことから、テーマに合っていると考えて選曲した。
クイズ	動物のシルエットクイズ	「きりん」「ライオン」「らくだ」、「コアラ」のシルエットのイラストを見て、動物名を言うクイズを行った。
アンサンブル演奏	シロフォンとピアノ連弾によるアンサンブル C. サン＝サーンス作曲『動物の謝肉祭』より《化石》	演奏効果が高く、動物を描いた作品を選んだ。シロフォンを演奏できる学生がいたのでシロフォンも紹介した。
エンディング	杉本竜一作曲《ピリーブ》	七夕を皮切りに、星や月にまつわる作品を演奏し、関連の科学的な解説も行ったので、最後は地球に目を向ける意味で本曲を選んだ。

### 3. コンサート内容と乳幼児の行動の質的観察

選曲意図などについて表1に示した。本章では当日の内容について簡易に記述し、当日の記録動画を観て行った質的観察記録も記述する。

#### 3.1. 冒頭

司会の学生二人が、「おねえさんたちは隣の大学から来ました。今日はクイズや歌など楽しみましょう」と話すと、こどもたちから「はい!」と元氣よく歓迎の声があがった。すぐに《アンパンマンマーチ》を演奏したところ、体を揺らしてリズムをとり、サビの部分と一緒に

歌っているこどもたちが多かった。終わりに近づくと一層大きな声で歌っていた。第1著者は、2000年から幼稚園訪問演奏会を経験しているが、冒頭で子どもの心をつかむことが何より重要であると経験的にとらえている。今回、こどもたちのよく知る曲を選んだことが功を奏し、一気に親近感が湧き、交流できる土壌を形成できたと考える。全体の中で評価が最も高かった。

次に、暗転にして、デジタル地球儀ダジック・アース（直径2M）に地球のコンテンツを投影し、司会の学生がこどもたちに「後ろ（舞台）にあるもの、何かわかるかな」と問うと「ちきゅう〜」と口々に言っていた。ダジック・アースの紹介をした後、司会の学生が「皆さん、七夕って知ってますか?」と問うと、「知ってる〜」と元氣よく声が上がった。

#### 3.2. 七夕を伝える

司会の学生コンビが交代し「七夕」について話を始めた。天の川を描いたA0サイズの画用紙に、織姫と彦星として、紙で制作した人形を出して展開した。「7月7日は七夕って知ってますか?」と司会の学生が問うと、こどもたちから「知ってる〜」と元氣の良い返事が返ってきた。七夕の話が始まり、画面を使って「まんなかにある、お星さまの集まりが天の川」と言うと、また「知ってる〜」と言っていた。話はほとんどのこどもたちが集中して聞くことができ、隣の友達と話し出すこどもは、そう多くなかった。約3分40秒間、ノンストップで学生が、七夕の物語を話したので、最後の方は少し騒がしくなりかけていた。終了後、「七夕がどんな日かわかったかな?」と問うと数名のこどもが挙手した。幼稚園で既に七夕について学び、それが反映されていたと考えられる。

どのような願い事をしたかと聞くと多くのこどもたちが挙手し、あててほしいと全身で主張した。6名ほどあてて「ポケモンと会いたい」など願い事を披露してもらった。ことのほか嬉しかったようである。友だちの答えを聞いて、自分とは違う、もしくは同じであることを確認

して楽しんでいるようであった。その後、《たなばた》のうたを多くのこどもと一緒に歌えた。

### 3.3. 星空に寄せて

司会の学生コンビが交代し、夏の夜空の解説を行った。この後、《星めぐりの歌》を歌う際に、多くの星座が出てくるので「星座」とは何かを学生が説明した。外部から参加した乳児の鳴き声が響き、少しざわついた感じではあった。赤く輝く「さそり座のアンタレス」「夏の大三角形（こと座のベガ、わし座のアルタイル、白鳥座のデネブ）」について学生が説明した。落ち着きがなく、よそ見をしているこどもも数名見られたが、ほとんどは学生の説明を一生懸命聞いていた。

こどもたちは、星について、深くは理解できていないかもしれないが、ダジック・アースによる視覚的インパクトを与えるとともに、このような話を聞かせることが重要であると考えている。「驚きを与えること」、「本物を見せること（ダジック・アースは本物の地球ではないが、本物の星の写真を見せることができる。）」は、教育上、知的好奇心を喚起させるのに最も重要である。このような種まきが、小学校以降、授業で月や星について学ぶ時に生きるのだろうと考えている。また保護者の知的好奇心の喚起も意識していた。保護者が興味があるものは、家庭でも取り上げて、発展させていくことができるであろう、家庭で、科学にせよ、音楽にせよ、コンサートをきっかけに話題を共有する展開となることに大いに期待している。

解説担当の学生の声が大きかったこともあり、他の解説の時よりも集中して聞いていることが多かった。《星めぐりの歌》は、静かな作品であるが、多くのこどもたちは、騒がず歌をよく聴いていた。乳児たちは少し騒がしかった。

### 資料1 コンサートで扱った星

#### 星の解説内容

・さそり座のアンタレスは、赤くて強い光を放っている。  
 ・セタの織姫（こと座のベガ）、彦星（わし座のアルタイル）、デネブ（白鳥座）が夏の夜空でひときわ輝いているので、「夏の大きな三角形」と呼ばれている。

宮澤賢治作詞・作曲《星めぐりの歌》に出てくる星（ダジック・アースで投影）

#### 1 番目

アンタレス（さそり座）／わし座／プロキオン（こいぬ座）／りゅう座／オリオン座

#### 2 番目

アンドロメダ星雲／北斗七星（おおぐま座）／北極星（こぐま座）

このセクションでは、星に関する曲を集めることにしたので、次にトランペット二重奏（無伴奏）で《星に願いを》を演奏した。こどもたちはきらきら光るトランペットに興味津々の様子であった。演奏が始まると最後列の二名のこどもが、音が大きい、聴きづらいと言うゼスチャーをして、耳をふさいでいたが、他のこどもにもそのような様子は見られなかった。演奏は約2分だった。後半は気がそがれているらしいこどもの様子が数名見られたが、多くのこどもは集中して聞くことができたようである。手歌については、次の章で詳述する。

### 3.4. 月に寄せて

身近な月について学生が解説することにした。集中力がそがれているこどもももいたが、ほとんどのこどもは集中して解説を聞いていた。内容的に、そう難解ではなかったからなのかもしれない。司会の学生が、「月は、日本以外の国では、おばあさんに見えている国もある」と言ったところ、数名が驚きの声をあげたので、こどもたちが集中して聞いていたことがうかがい知れた。月にちなんだ曲ということで、フランス民謡《月の光に》を、声楽ゼミの学生たちが女声合唱で歌った。ほとんどのこどもたちにとって、知っている旋律だったのか、集中して聴くことができたようである。

また月に近いということで《Earth》を、フルートとエレクトーンで演奏した。《Earth》は、伴奏がダイナミックで壮大な曲で、是非聴かせたいと考えた。コンサート開始から37分目だったので、こどもたちには疲れが見え始めていた。フルートとエレクトーンの楽器解説や、「Earthが何か」というクイズは、興味深く聞いていたが、演奏になると約6分間だったので、そういうわけにはいかなかった。エレクトーンの音が小さくしか出せなかったこともあり、集中力がそがれて、ざわつくこどもが多かった。しかし冒頭の、フルートが演奏し始めた時には皆、興味を持っていたようで、静かに聴いていた。また騒がしいながらも、フルートを吹く様子を模倣するのに熱中しているこどもも2名ほど見られた。

### 3.5. 動物を取り上げる

動物は子どもたちにとって、身近な存在である。そこで動物のシルエットクイズを行った。「きりん」「ライオン」「らくだ」「コアラ」などイラストでシルエットを描きそれを提示して、動物の名前を問うた。こどもたちはすぐに答えが分かり、喜んでいる姿が見られた。絵がイラストのようなものではなく、本物に近く描けた方が良かったのではないかと考えている。今後の課題である。

その後、『動物の謝肉祭』の《化石》を演奏するために、シロフォンを出して楽器紹介をした。学生がシロフォンを叩くとこどもたちは静かになり集中して聴いていた。その際、《化石》の旋律を8小節のみ弾いて、どのような動物が表現されているかを問うた。「蝶々」「りす」など、シロフォンの硬質な音色、早いテンポから想像した様々な動物の回答が返ってきた。「いもむし」と言うユニークな回答もあった。司会の学生が「化石」と、作曲者がつけたタイトルを言い、「(化石って何か)知ってるかな?」と聞くと「知ってる～」と10名くらいの園児が挙手していた。こどもがわかりやすいようにと、司会者が恐竜のイラストを見せながら化石の話をしした。

サン＝サーンスの『動物の謝肉祭』は、こども向けのコンサートでよく使う作品である。数分の小曲から構成されており子どもの集中力がそがれなくて良い。音の特徴をとらえて、様々な動物を答える子どもの様子を見るたびに、小学校以降の学習指導要領の重要テーマである、「音楽を形作る要素」と「曲想」との関係の理解に繋がられる可能性を確信する。今回の回答である「化石」は、生きている動物ではないので、音を聴いてどのような動物が描写されているかを問うのに無理があったが、演奏を集中して聴かせたかったのでクイズを行った。この時点で、学生がクイズの為に、シロフォンを弾く様子を模倣をしているこどももいた。

《化石》の演奏が始まると、冒頭のピアノの和音に強いインパクトがあったようで、こどもたちは一気に水を打ったように静まりかえり演奏者を凝視した。その後、演奏の様子に注目していた。中にはリズムをとったり、手拍子をしたり、身を乗り出すこどもも複数いた。また乳児が、最前列に出てきて腕をぶるぶる振り回していた。これまでの鑑賞曲の中で最も反応が多く見られた。

### 3.6. エンディングと概観

エンディングの《ビリーフ》は、保護者も必ず知っている作品であるので、使うことが多い。園児たちも一緒に大きな声で歌っていた。使用した楽譜が女声合唱版で、音域が高かったので、歌えないだろうと思っていたが歌えていた。

以上、こどもたちは、時に騒ぎもしたが、概ね集中して音楽に耳を傾けることができた。全体として、静かな曲が多かったが、もう少しアクティブな音楽や、ボディパーカッションなど参加型企画を導入できるとなお良かったと考えている。そのような中で、今回、特筆すべきは手歌の導入である、次に手歌について詳述する。

#### 4. 手歌による「見える音楽」体験とバリアフリーな表現の共有

##### 4.1. 日本手話の言語的特性と手歌の位置づけ

手歌活動を理解するためには、その基盤にある日本手話（Japanese Sign Language: JSL）の言語的特性を整理しておく必要がある。武居2008によると、日本手話は、聴覚障害者が社会的・文化的相互作用の中で自然に形成してきた視覚-身体モダリティの言語であり、音声が必要とせず意味を構築できる独自の文法体系をもつ。手指の形状や動き、空間配置、非手指的要素（表情・体の傾き・視線の方向など）が統語的機能を果たす点において音声言語とは異なるが、言語学的構造を備えた言語である。

一方で、高嶋2015によると、日本語対応手話は日本語の語順に沿う逐語的体系であり、日本手話とは異なる。本研究で取り上げる手歌は、この日本手話の表現的特性を活かしつつ、音楽のリズムや情感を身体動作によって再構成するものである。したがって、手歌は手話言語学と音楽身体表現の交差点に位置づけられ、言語が音声から身体へ、聴覚から視覚へと拡張される場とし位置づけることができる。

また、山本2010が指摘するように、手話の社会的認知はいまだ十分とは言えず、「手話は言語である」と繰り返し説明せざるを得ない現状がある。手歌の実践は、この認識のずれに対する社会的・教育的な応答であり、音声に依存しない「見える言語」としての手話の可能性を、音楽表現の領域において可視化するものである。

##### 4.2. 非言語的認知機能へのアプローチとしての手歌

武居2008は、手話研究が言語獲得研究に与える示唆として、人間の言語能力が音声に限定されないことを明らかにしている。手話を通じた言語獲得は、感覚モダリティを超えた普遍的な認知原理を示すものであり、『言語=音声』という通念を再考を促す。この観点から、手歌による音楽表現は、音楽的意味を聴覚ではなく身体的運動によって構築する「非音声の言語活

動」として位置づけられる。

高嶋2015は、手話使用者の心理言語学的研究を通して、視覚的注意の焦点化、空間的配置の理解、手指運動のタイミング調整などが、言語処理の中核をなすと論じている。手歌の活動は、これらの機能を音楽体験に転用し、聴覚-視覚-運動の統合を促進する多感覚的表現として機能する。

さらに山本2010は、手話に対する社会的認知の低さが教育現場での言語的包摂を妨げていると指摘する。手歌による「見える音楽」は、この音声中心主義を超える教育的転換を提示し、感覚的アクセスの多様化を通して学習者全体を包摂する実践として意義をもつ。

##### 4.3. 《きらきら星》における実践と質的観察

本研究の実践では、ホワイトハンドコーラスNIPPONの講師を招き、シャンソン《きらきら星》を題材に、日本手話を基盤とした手歌体験を実施した事例を対象とした。講師は冒頭で「星」という手話を提示し、両手の指先を開閉させながら光を散らすように動かしたり、両手をひらひらと揺らしたりした。園児や乳幼児たちはその動作を模倣しながら空を指差し、「ほし!」「きらきら!」などと声を上げた。ここでは、言語的理解よりも、視覚的模倣と同期運動による即時的な相互作用が成立していたと解釈される。

続いて講師は、音楽のリズムに合わせて身体を左右に揺らしながら「きらきら」の部分強調した。子どもたちは講師の表情と動作に引き込まれ、全身を使ってリズムを再現した。高嶋2015が指摘するように、視線・動作・表情の三要素が一体となって意味を構築する過程が観察され、感情理解が身体運動と視覚的刺激的統合によって促進されていた。

特筆すべきは、講師が子どもたちの自発的表現を積極的に受け止め、即興的な模倣を返す姿である。「大きなお星さま」と両腕を広げる子どもの動作を講師が再現すると、他の子どもたちも次々に模倣し、空間全体が「星の動き」に包まれた。この相互模倣の連鎖は、武居2008

が言語獲得における社会的相互作用の核心と述べた現象と類似しており、音楽的表現を通して、「歌詞における意味の共同生成」が行われていたと示唆される。

さらに、観察記録によると、乳幼児を抱く保護者が、講師の動作に合わせて子どもの手を導き、共に動作を行う場面が複数確認された。子どもの視線は講師の手、保護者の顔、そして空間全体へと移動し、身体的模倣が情動共有の基盤として働いていた。このように手歌は、聴覚情報に依存しない形で音楽的共感を形成し、世代や能力差を超えて表現を共有する媒体となっていた。

山本2010が言うように、手話は社会的承認を通じて「言語」として確立される。手歌の実践では、この社会的承認が「音楽表現を通して可視化される」点に学術的な新規性がある。すなわち、手歌は音楽を媒介とした言語的包摂の試みであり、非音声的コミュニケーションの教育的可能性を提示するものである。

#### 4. 4. 学術的意義

本研究の成果は、言語学・音楽教育学・発達心理学の三領域を横断する、学際的意義を有する。第一に、言語学的意義として、手歌は手話の文法的・視覚的特性を応用し、音楽を新たなモダリティに翻訳する実践である。これは、武居2008が示した「言語獲得のモダリティ独立性」を実証的に裏づけるものであり、言語が身体的・空間的表象を通して生成されうることを具体的に示している。第二に、心理言語学的・教育的意義として、手歌は高嶋2015の指摘する「視覚的注意と空間的同期」を基盤とし、感覚統合を通じた認知発達を促進する教育的手法である。聴覚障害児を含む多様な発達段階の子どもに対し、音楽と言語の境界を超えた学習経験を提供する点に、インクルーシブ教育の実践的価値がある。第三に、社会言語学的・文化的意義として、手歌は山本2010が問題提起した「手話の社会的認知の欠如」に対する文化的・実践的応答である。音声中心的な社会において「言語の可視化」と「音楽の身体化」を同時に

実現する手歌は、手話文化の理解を広め、表現のバリアフリー化を進める重要な契機となる。

総じて、手歌による「見える音楽」体験は、言語を「聴くもの」から「感じるもの」へと再定義し、人間の表現行為における音声・身体・空間の統合的モデルを提示する学術的価値を有している。本研究は、手話言語学と音楽表現研究の接点を切り開く先駆的試みとして位置づけられる。

#### 5. 追跡調査の結果から

実施後1か月の間、実施幼稚園でどのような行動が見られたかの追跡調査を依頼した。

コンサート当日、帰りのバスを待つ時間に、コンサートで歌った《たなばた》《きらきら星》《ビリーブ》などを歌う姿や、実施後2週間ほどの間に、教員の話や、絵本で、星にふれる機会に、「この間、お姉さんたちと歌った」「この間、おねえさんたちとのコンサートで話を聞いた」「この前、お姉さんたちが言ってた」や、ダジック・アースを示す「まるいので見たね」などの発話があったことが報告されている。「空を見て、織姫と彦星を探そう」と楽しみにしていた園児もいたとのことである。七夕については園でも触れていると思われるので、どこまでがコンサートの直接の影響か判別しづらいが、「お姉さんたちと…」や「まるいやつ」と言ってたことから、コンサートは園児たちの印象には強く残っており、少なからず影響があったことが示唆される。

#### 6. 幼稚園側からの見解

京都幼稚園の子どもたちは、七夕が近かったことから、笹飾りを作ったり、短冊を書いたり、日常生活において季節を感じながら過ごしていた中でのコンサート開催であった。

今回のコンサートは《アンパンマンマーチ》からのスタートだったが、京都幼稚園の子どもたちにとっても、外部参加の乳幼児にとっても、耳なじみのある曲からスタートしたことで、会場全体がリラックスした雰囲気にも包まれ、こどもたちの表情もにこやかになっていった。

七夕がどういうものなのかということや、彦星さま、織姫さま、天の川については、パネルシアターを通して知ると共に、クイズ形式になっていることで、こどもたちはより夢中になって耳を傾けていた。また、皆で《たなばたさま》の歌を歌ったことで、より気持ちが盛り上がったと推測する。

同じ幼稚園の子どもだけでなく、初対面の乳幼児とも声を合わせて歌うことで、普通の保育では得られない、より新鮮な気持ちを得るとともに、コンサートに積極的に参加できる喜びがあったのだろう。子どもの中には、「みんなで歌ったら、大きい声になるなあ。空に届くかなあ。」と話している子もいた。歌が始まると、ぐずっていた未就園児も、少し表情を変え、自分ではまだ歌えないけれども、自分より年長の園児の様子をキョロキョロと見ている姿が印象的であった。年齢は様々であったが、子どもたち一人ひとりがそれぞれに音を感じ、歌を感じ、参加していたといえるだろう。

会場には、デジタル地球儀ダジック・アースが中央に存在していたことも、子どもたちの興味を引き付けていた。会場に入るなり、「なに、あれ?」「あんなん、見たことない。」と言っている子がいた。視覚的に十分なインパクトをもっていることで、自然と興味が移っていった。そのダジックアースに星座が投影され、「星めぐりの歌」「星に願いを」と続いていたが、電気を暗くしたことで、子どもたちが夜の世界へと引き込まれていっている様子も見られた。

ホワイトハンドコーラスNIPPONの講師による「きらきら星」も印象的だったようだ。音楽をただ聴くだけのコンサートではなく、また声を出すことのみならず、時には身体をつかって表現したり、身体全体で楽しむことで、子どもの興味が広がったといえる。

《Earth》の演奏では、それぞれの音の世界を、子どもたちなりに味わっていた。フルートとエレクトーンの音が違うということに気がつき、「なんか、一緒にすごい。」と言っている子がいた。何かわからないけれど、それぞれの音

を感じ、そのハーモニーを心で感じ、受け取っていたからこそその言葉なのだと推測される。

全体を通して、1つ1つの展開が、音楽を奏でることのみではないことで、子どもたちも飽きることなく、コンサートを楽しめた。地球の生き物クイズも良いタイミングで用意されていたため、子どもたちも後半にも関わらず、興味を持続することができた。「次は何か?」と展開を楽しみにする発言も聞こえていた。

全体として振り返ってみると、今回のコンサートは、子どもたちにとって、十分にワクワクする要素がたくさんあった体験だったといえるだろう。

コンサート終了後の保育室では、年長児が今日教えてもらった星座（こと座・わし座・はくちょう座）の名前を友達同士で確認しあっていたり、「今日星が見えるかなあ?」「お母さんにも教えてあげよう。」と話をする姿が見られた。

星座に対して興味を持った子が、遊戯室（本の部屋）で「空や天体」に関する図鑑や本を見ている姿も見られた。

参加した保護者によると、「こどもに人気のアニメの曲から本格的なクラシックの曲まで、ジャンルに縛られない演奏が良かった」「こういった大学連携の教育に魅力を感じる。」とのことだった。様々なジャンルの音楽に触れることは、こどもたちの感性を伸ばし、やがては表現力の豊かさにつながっていく。家庭ではなかなかできない体験を幼稚園という場でできることは、保護者にとっても価値があるといえるだろう。また、外部からの参加者にとっても、親子で一緒に楽しみたいけれども他の方に迷惑をかけてはいけないなどの制約がないことが魅力の1つでもあるようだ。

1つの興味がまた違う興味へとつながり、点と点がいつしか線となっていく。子どもたちの好奇心や知りたいという欲求が自然と増していくような環境作り、様々な体験を積み重ねることのできる幼稚園でありたいと思っている。

今後、こういった形のコンサートを継続するならば、コンセプトである「泣いても、笑っても、歌っても、踊っても大丈夫!」という軸を

大切にすることではないかと考える。演奏者や主催者は、「静かに聴かなくてはならない」というような緊張を参加者に与えるのではなく、どのような反応も大らかに受けとめ、皆がゆったりと音を楽しめるような、リラックスできる雰囲気をつくるのがことのほか重要となるであろう。特に小さな子どもたちはその場の空気を敏感に感じとる。初めての場所では、なかなか溶け込めない乳幼児も多い。だからこそ、大学生と幼稚園と共同で行う手作りのコンサートならではのアットホームな雰囲気が大切だと考える。このようなコンサートだからこそ、子どもたちがリラックスして心から楽しめる機会となるのではないかと。内容を充実させることはもちろんであるが、例えば完璧な演出や演奏でなくとも、そこに「あたたかさ」があることが非常に重要だと考える。

音楽を座って聞いている様子はなくても、そのホールから出ずに、流れてくる音をバックミュージックとしながら、自分の世界で別の遊びを始める乳幼児も見られた。聞いている様子はなくとも、その音が心地良く、良い刺激であったからこそ、子どもの表現だったのではないだろうか。

子どもたちの感じる力や音楽を楽しむ力、豊かな表現力を育成するうえで、音楽は欠かせないものである。乳幼児にとっての豊かな文化体験をこれからも大切にしていきたい。

## 7. 大学側からの成果と課題

### 7.1. 構成について

今回のコンサートは、児童学科(幼稚園教諭養成)の学生と音楽教育学専攻(中高音楽科教諭養成)の学生とが出演した。児童学科の学生達は、そこまでに、「幼稚園訪問演奏会」(2024年6月、12月)、京都市下の区役所主催の3つの児童館合同乳幼児コンサート(2024年12月)の計3回のコンサートの実施経験があった。いずれも作品を演奏し、園児に鑑賞させるのものではなく、こどもとのあたたかいやり取りによって進行し、一緒に歌う、身体表現をする、クイズなどを含む内容で構成していた。そ

の為、本演奏会の構成について、そう驚きはなかったが、音楽教育学専攻の学生達にとっては、驚きのある経験となったようである。多くの学生が「子ども向けのコンサートに関わるのは初めて」と述べ、普段の大学生活では得がたい経験として、本企画が非常に新鮮で刺激であったようだ。また手歌の体験を通じて、こどもたちが、その時には深く理解できなくても、教育的意義のあることを提供することの重要性に気づけたようである。

### 7.2. 音楽について

演奏中、こどもたちが見せた意欲的で元気な姿に多くの学生が感銘を受けた。「こどもたちの反応に圧倒された」との声もあり、音楽教育学専攻の学生たちにとっては、音楽がこどもたちに与える影響の大きさを、演奏者として直接感じ取る場面となった。七夕にちなんだ楽曲の演奏や、こどもたちとのふれあいを通じて、音楽の新たな役割や可能性を実感する機会となった。

児童学科の学生は、こどもの集中力が続かない場面がしばしばあったことから、内容や話し方を更に工夫すべきと感じる学生もいた。歌や演奏の場面がやや多いと感じ、今後はもっとこどもたちの知っている曲を演奏し、こどもたちが飽きないような工夫をしようと、より子どもが喜ぶものを作りたいという意欲を示していた。

しかしながら、幼児の未知曲であっても《化石》の演奏が始まった時に、音楽に気づいて一瞬静かになるタイミングがあったことが印象に残っており、こどもたちが、音楽を聞いているのが伝わってきて、音楽のすごさを感じたとも語っている。本物の音楽を聴かせる場面をバランスよく配置することが重要と気づいたようである。

### 7.3. 乳幼児とのやりとりについて

演奏を聴くだけでなく、クイズや手歌など参加型の要素が盛り込まれていた点は、こどもたちの興味を引き出すうえで有効ととらえた学生

が多い。クイズなどの場面で、こどもの観察力と発想力に驚き、手ごたえを感じた学生もいた。こうした「ともに楽しむ」要素が高く評価されており、今後も積極的に取り入れるべきであると感じた学生が多かった。

児童学科の学生たちは、こどもたちへの対応に関する反省が多かった。特に、外部から参加していた乳幼児への自分たちの対応を未熟だと感じたようだった。クイズの際に、乳幼児が緊張で答えられなかった時、適切に対応できなかったことを悔やんでいた。また挙手できないこどもにもフォローが必要だと感じていた。このようなコンサートでは、演奏と同等に、こどもとのあたたかいやりとりが何より重要であるとさらに認識する結果となったようである。

#### 7.4. 事前の準備について

運営面においては複数の学生が不安を感じていた。特に、コンサートの準備がどのようなものかを知る音楽教育学専攻の学生からは次の点が改善点として挙げられた。

【1】練習機会の不足：歌の練習を通して行う時間が限られており、安心して本番に臨めなかった。【2】リハーサルの不足：本番と同じ流れでのリハーサルが事前に行われていなかったため、当日に戸惑いが生じた。【3】立ち位置の共有不足：立ち位置や動線の確認がリハーサル時に行われたため、混乱があった。事前に資料として提示しておくべきとの意見が出た。

児童学科の学生たちも、これまで経験した演奏会よりも規模が大きいかかわらず、準備が万全ではなく不安を感じたと述べる学生が多かったが、結果的には無事に成功したと感じている学生も多かった。予定通りに行われない諸々のハプニングがあっても臨機応変に対応すること、入念に準備しておくことの必要性を学んだとのことだった。

パフォーマンスの為の準備に先がけて、内容構成の為に、幼稚園側と学生達との議論ができるとさらに学びとなったと考えられる。

#### 8. 総合考察

以上、「第2回京女こどもコンサート」を対象に、幼大連携の幼稚園コンサートの内容・質的観察、追跡調査の検討を通して、成果、課題について見てきた。

本コンサートは、教育・福祉・音楽の実践的接点として有意義な機会であった。学生たちは実体験を通じて、子どもたちに向けた音楽表現の在り方や準備の重要性を学んだ。今後は、事前準備の充実と参加者間での情報共有を強化することで、より完成度の高いコンサートへとつなげていくことが期待される。

当該コンサートのコンセプトは「泣いても、笑っても、歌っても、踊っても大丈夫！」である。実際に、乳児が泣いたり、歩いたりしていることが多かった。それについて、園の主任である松田から、最後の挨拶の際、「それもまた子どもの素敵な表現である」という言葉があった。学生には、それが印象深かったようである。乳幼児の保護者は、通常のコンサートから締め出されていることが多い。そのような保護者が気軽に参加でき、あたたかいコンサートができることは、社会的にも意義深いであろう。学生にとっては、子どもたちの反応を間近で見ることができ、机上の学問だけでは得られない大きな学びがあり、極めて教育的意義が大きいことを再認識することができた。

内容については、ただ乳幼児が喜び、楽しければ良いと言う価値基準ではなく、乳幼児の発達を意識し、それに貢献するものであったり、親子の知的好奇心を喚起する内容でありたいと考える。夜の星空の解説は、内容が難しいとわかっていたが、それを意識して取り入れた。事前準備については、大学生にだけ任せておくのではなく、教員の適切なファシリテーションが重要であると考え。今回は十分にはできていないが、今後、大学における授業で教員も一緒に徹底的にディスカッションを行い、プログラムを構成するようにすれば、大学生にとっても主体的、共同的、かつ深い学びを経験できる、有効なアクティブラーニングとなりえるであろう。

## 参考文献

- 荒川恵子・松田幸恵2024「幼大連携のSTEAM教育についての一考察：幼稚園における七夕コンサートを通して」『京都女子大学教職支援センター研究紀要』第6巻 pp.123-134.
- ガハブカ奈美2025「仏教讃歌の教材化における一考察：体験型演奏会—仏教讃歌と手歌—の開催を経て」京都女子大学宗教・文化研究所発行『研究紀要』第38巻 pp.41-59.
- 久保田葉子2009「子供のための学校訪問コンサート：音楽を届けること，音楽を通して伝えること」『尚美学園大学芸術情報研究』第16号 pp.43-54.
- 駒久美子2008「幼稚園における新たな参加型コンサートの可能性」『音楽教育実践ジャーナル』第6巻第1号 pp.116-125.
- 坂本光太2025「乳幼児向けコンサートによるリズムを中心とした音楽教育プログラムの構成と評価：「京女こどもコンサート」を事例として」『京都女子大学教職支援センター研究紀要』第7巻 pp.93-104.
- 佐々木寿子・工藤敬・佐藤千聡・青柳美歩2021「幼少期における「生演奏」の重要性の一考察」『羽陽学園短期大学紀要』第11巻第3号 pp.51-63.
- 武居渡2008「手話研究の現状と展望—手話研究が言語獲得研究に貢献できること—」日本認知学会発行『認知科学』第15巻第2号 pp.289-301.
- 高嶋由布子2015「手話の心理言語学的調査の実践と問題」日本認知学会発行『認知科学』第22巻第1号 pp.181-193.
- 山本雅代2011「手話はいかに捉えられているか：大学生を対象とした調査から」関西学院大学言語教育研究センター紀要『言語と文化』第14号 pp.29-42.

## URL

- ・京都幼稚園HPより「第2回 乳幼児のための京女こどもコンサート」<https://kyoto-kindergarten.ed.jp/linkage/>（2025年11月1日閲覧）

- ・「NPO法人 ダジック・アース・プロジェクト」HP <https://www.npo.dagik.org/>（2025年11月1日閲覧）
- ・「天体と音楽」実行委員会HP <https://sites.google.com/view/tentaimusic/>（2025年11月1日閲覧）
- ・「一般社団法人 日仏DUMI協会」HP <https://www.dumi-japan.com/contact>（2025年11月3日閲覧）
- ・「ホワイトハンドコーラスNIPPON」HP <https://elsistemaconnect.or.jp/activity/whc-nippon/index.html>（2025年11月1日閲覧）
- ・文部科学省（2019）学校における芸術の充実に向けて～文化庁への移管～ [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/giji/\\_icsFiles/fieldfile/2019/06/25/1418186\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/fieldfile/2019/06/25/1418186_4.pdf)（2025年10月20日最終閲覧）
- ・文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編 [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/fieldfile/2019/03/18/1387017\\_007.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2019/03/18/1387017_007.pdf)（2025年11月4日閲覧）

## 謝辞

演奏会を主催して下さった京都女子学園理事長、京都幼稚園園長 芝原玄記氏、先生方、参加して下さった園児と保護者の皆様、外部からの参加者の皆様、手歌を作成し、有益なアドバイスを下さったホワイトハンドコーラスNIPPON代表のコロンエリカ氏、同東京チームサイン隊講師の井崎哲也氏、手歌を作成し、指導して下さった同京都チームサイン隊講師の馬場昌子氏、ダジック・アースのコンテンツ開発と投影をして下さったNPO法人ダジック・アース・プロジェクト事務局長土井正治氏、論文執筆に際して、有益なご助言を頂きました京都女子大学名誉教授岡林典子氏に深く感謝申し上げます。

## 付記

本稿は、荒川が第1, 2, 3, 5, 8章を、ガハブカが第4章を、松田が第6章を担当し、荒川とガハブカで第7章を共同執筆した。